

日本の近代景観の形成と変化

― 近代景観史学への展望 ―

神立春樹

一、はじめに

「日本の近代景観の形成と変化 ― 近代景観史学への展望 ―」という小論は、わが国の明治以降の景観の形成と変化を検討するものである。サブタイトルの「近代景観史学への展望」は、小論をそれに結びつけていくことを念頭に置いているという程度のもので、それ自体に論及することを課題とするものではない。そうではあるが、ここでこのサブタイトルについて若干の説明を行なう。

景観史学というのは一つの歴史学ということではない。それは景観というものをもって歴史を考察していくという、歴史研究の一つの方法であると考ええる。歴史研究は基本的には文献にもとづいて、それを主要な資料として研究するもので、このような文献史学が主要なものである。しかし、ある歴史的問題を検討しようというとき、それに関する文献が必ずあるというものではなく、むしろ文献がない場合が多いといえる。それ自体は独自の学問である民俗学も歴史研究の一方法の提示といえる。景観史学は景観に基づき歴史を解明しようという歴史研究の一方法である。木村礎氏はつとに歴史の方法としての景観研究を追求され、歴史研究における景観重視はすでに一般化している⁽¹⁾。多くの研究成果があらわれているが、いまなお

近代以降についてのものは多くはない。⁽²⁾ わが国明治以降の景観の形成を討する小論に「近代景観史学への展望」というサブタイトルを付した所以である。

二、景観の史的考察の視点

(一) 人間の営為と景観

1. 景観

まず、この景観という用語であるが、例えば、岩波書店の『広辞苑』には、「①風景外観。けしき。ながめ。また、その美しさ」とある。そこで、「けしき」をみると、「けしき：山水などのおもむき、ながめ。風景」とあり、「ながめ」は、「ながめ：見渡したおもむき。眺望。けしき」とあり、「風景」は「風景：けしき。風光」である。ここでは、AをBで説明し、BをCで説明し、そして、CをAで説明するというようなことである。ただそこには、「景観：②自然と人間界の事とが入りまじっている現実のさま」というのがあり、これがここでの私の内容限定との接点があるように思える。

私はこの景観を、景観とは人間の営みがつくり出した眺め、という意味内容のものとする。⁽³⁾ したがって、人間の営みの結果ではない眺めはここでいう景観ではないということになる。例えば、北極、南アメリカアマゾンの原生林、富士山麓の樹海、これらのもともとの眺めは景観とはいいたくない。また、人間の営みそのものは、たとえば労働の姿そのもの、壮絶な喧嘩や熾烈な戦争の場面そのものなどは景観ではなく、静粛な、あるいは荒れている授業の眺めも景観ではない。

2. 人間の営みと景観の形成

人間の営みと景観の関係であるが、そもそも人間は、自然に働きかけることによって生存に必要な物資を得てきた。働きかける場合は、林野であり、農地であり、河沼湖海であるが、そのベースは大地である。人間は食・住・衣のために大地に働

きかけることによって生存し得てきた。大地への働きかけは、草木やその実を採取すること、魚介を漁ること、虫を捕り、鳥獣を狩ること、そして植物を栽培し、動物を飼育することなど多様であるが、このような働きかけによって糧を得、その他の生活資材を得ることができたのである。そして、この働きかけそのものが景観をつくりだすのである。例えば、農耕段階に入ると、大地は農地となり、住居のための家屋ができ、集落ができる。これらの行為を通じて、景観が形成される。それは、耕地、住居、周辺の用水、とりまく林野などを主要構成要素とするムラ景観となるのである。

3. 景観の変化

ところで、この人間の生活の為の営みはとどまることなく、変化していく。それは多くの場合、拡大的变化である。人間の営みは、初めは自然に寄り添いながら、その規制に従いながら、慎ましく行なわれるが、やがて自然を大きく変え、それを制御し、さらには自然改造に至るのである。慎ましさは傲慢となり、自然を征服したかのごとくであるが、それはやがて自然からの手痛い報復を受けるに至りさえするのである。

いずれにしても、このような、人間のその時期によって異なる営みによって景観は絶えず変化し、新しい景観が形成されるのである。

(二) 都市景観と農村景観 — 本考察での限定

以上のように、景観は人間の生活の営みのあらゆる場所に形成される。しかし、人間の生存、生活のためのもっとも基本的で重要なものは、生存のための糧、そのほかの生活資材を大地に働きかけて獲得する農林漁業を行なうところに形成されるものであり、それは村落景観（農村景観）である。そしてその対極には、都市生活があり、そこに都市景観が形成される。ここでは、検討の対象を農村景観と都市景観に限定する。

三、前近代の社会と景観

明治以降の日本の近代社会は、それ以前の前近代社会の在り方を前提として成立したように、近代日本の景観も前時代に形成された景観を前提とし、その変化のうちに新しい景観が形成されたのである。そこで、前時代における景観について整理・把握することが不可欠となる。⁽⁴⁾

明治以降の近代日本に先立つ江戸時代は幕藩領主制という独特の構成の社会であった。そこでは、領主層は都市集住を基本とした。この領主層の集住する城下に商人・職人などが集住した。このような武家方と町方によって城下町が形成された。政務所であり領主の居所である城を取り巻く城下には上級家臣から下級家臣までの大きな屋敷から小前長屋までの家屋が町筋を形成し、他方、商家の町筋、各種職人の町筋が形成されるのである。領主層などの菩提寺などの寺が点在し、あるいは寺町を形成した。他領国との交易・物資移送の拠点としての河岸場が形成される。このようなものが全体として都市景観を形成していたのである。

他方、農山漁村は社会を根底から支える農産物をはじめとする第一次生産を行ない、生活を営なむ場所である。

この時代には、短婚小家族という家族形態のものと小農が農業生産の単位であった。耕地は個別農家が所持し、それに対応する年貢を負担するが、農業生産に不可欠の肥料採草源の林野と感慨用水の用水路は共同利用でムラの共同管理下にあった。このようなことにより、農家が生産をめぐる共同性を軸としてムラ共同体を形成していた。

居所としての家屋、家を廻る木立、生産の場としての田畑や用水路、周辺を廻る林野、家々や田畑をつなぎ、村を外部と結ぶ道路、祠や社寺など、このような要素から村は成り立っていた。それらが一体となって村落景観が形成されていた。

明治以降の始点の時期の都市、農村の景観はかくなるものであった。それが近代化にともない変化し、新しい景観が形成されるのである。

四、近代の景観の形成

(一) 都市景観

近代化過程において、近代都市が成立する。日本にはその前時代に各地に城下町をはじめとする都市があったが、それらは近代になり、地方行政の中心地として、あるいは近代産業・商業都市として展開していく。従来の各都市はさまさまの差異をみせながらも、行政庁舎、学校校舎、商業・金融機関建物などが洋式建物として建築され、道路、橋梁の建設、あるいは鉄道・路面交通機関の敷設、駅舎の築造、さらに工場建物の建築、などにより、旧来の都市景観は大きく変化し、新しい都市景観が形成された。そこには新たに形成される都市住民各層の居住地の様相も加わる。

この旧来の都市からの転換、その景観の変化・形成の例を、まず東京についてみる。⁽⁵⁾

近世期の首府江戸から近代国家の首都へと転換した東京は、維新の騒乱による低迷をくぐりぬけ、明治二〇年代（一八八七〜）に入った頃から、人口も一〇〇万人台を回復し、以後膨張の一途をたどった。すでに、銀座煉瓦街の建設（明治六・一八七四年）などに新しい都市の様相をみせるが、その変化が著しくなるのはこの二〇年頃からである。

田山花袋は、『東京の三十年』（一九一七年）において、「十四年頃の東京と十九年頃の東京ではかなり夥しい変遷を少年の私の眼に映じさせた」、明治一〇年代（一八七七〜）の後半、日本橋、京橋の通りも銀座通りを除いて西洋造りの大きい建物は後の須田町の三階造りの一つだけだった、通りには路地が多くあり、火除地が残っていた、丸の内は陰気で荒涼とした所であった、と記している。⁽⁶⁾

明治二〇年代（一八八七〜）になると、新宮殿が造営され（明治二二・一八八八年）、これを中心とした官庁街の形成、帝国議事堂の営造（明治二四・一八九一年）、政府高官官邸の建造で官衙がその様相を整えた。丸の内の払下げ（明治二三・一八九〇年）と三菱一号館（明治二七・一八九四年）の建設で、ビジネス街が形成され、華族制度の実施による旧公卿や旧藩主、豪商の

東京集住、皇族の邸宅、外国の公館とあいまって都心の高台に豪邸が建った。日比谷練兵場あとは公園となり（明治二六・一八九四年）、丸の内一帯はその姿を整えた。帝国大学などの高等教育機関の設立、上野図書館や博物館などがその姿を見せた。他方、後楽園の陸軍砲兵工廠などの軍工場が黒煙を吐き、北の丸の兵營が整い、軍都の様相もみせる。他方、近代工場が下町や臨海部に建設され、下町には庶民の生業と生活の様相が示された。全国的な鉄道の始点として鉄道網の拠点化、その象徴の東京駅、上野駅の開設、郊外電車や路面電車（明治三六・一八八三年新橋・品川間）が開通し、木造の橋が鉄骨のそれへと変った。明治二一（一八八八）年公布された東京市区改正条令にもとづく都市改造事業により、道路新設・改修、河川新鑿・改修などが行われた。神田のニコライ聖堂（明治二四・一八九一年）、京橋に歌舞伎座（明治三二・一八八九年）、浅草の凌雲閣（一二階・パノラマ館、国技館（明治四二・二九〇九年）、丸の内の帝国劇場（明治四四・一九二一年）も新しい景観構成のそれぞれである。

かくして東京は明治三〇年代（一八九七年）には近代都市としての様相を示し、近代都市東京の景観が形成された。しかし、江戸の名残はこの東京の随所にみられた。

田山花袋は、東京の変化を描写の後、「かうして時は移つて行く」、あらゆるものが変わっていくが、「五十年後は？ 百年後は？」と結んでいる。⁷⁾

景観も変化していく。

地方都市もそれなりの変化があった。岡山市の場合をみよう。⁸⁾

ここでの変化は聳え立つ岡山城の縮小、外堀・中堀の埋め立て、そして旧城内に官衙・学校が建設される。紡績工場が建設され、明治二四（一八九二）年に山陽鉄道岡山駅が隣接村上石井村に設置され、さらに、明治三一（一八九八）年中国鉄道岡山市駅が設置された。鉄道の開通により、従来の旭川河岸場辺の町筋の戸口停滞によって様相が異なってくる。しかし東京の市区改正条令に模した計画的な都市改革は明治四〇（一九〇七）年三月の市区改正調査委員会の設置を待つ。地方都市

の変化は首都東京より遅く、小さい。都市景観の形成もそうである。

地方都市の変化はそれぞれによって異なるが、しかし、その変化、そして景観の変化を見過せない。

(二) 農村景観

江戸時代は、単婚小家族の農民家族が生産と生活の単位であり、家々が村共同体を形成して、生産と生活が行なわれていた。住所としての家屋、家をめぐる木立、生産の場としての田畑、用水路、周辺にある林、内外と結ぶ道、祠や神社、これらが一体となって村落景観を形成していた。

近代化の過程で行われた地租改正、それによって与えられた農地の喪失、地主制的関係の成立にもかかわらず、農業は家族単位の小農生産であり、村はこの小農の生産と生活の場であり続けた。ここでは、牛耕・馬耕がみられたとはいえず、基本的には手労働であり、耕地整理という圃場整備も行われたが、それは限られたものであった。もちろん、明治以降、北海道での開拓による新農村、岡山県の児島湾干拓地などでは、旧来の農村とは異なる圃場形態、住居配置、集落形成で、新しい村も形成されてはいる。またひろく、養蚕の盛況による桑園の増加などの作物の推移があり、そして村々に役場の設置、小学校が設置された。このようなものが一体となって近代日本の農村景観を形成した。

近代化過程において農村の人々の生活は変化している。長塚節『土』には農村民の生活に時代の波がひしひしと押し寄せている側面もあることが明らかにされている。⁹⁾ また、消費生活をも把握する各地の「村是調査書」には、「住家ノ如キモ平屋草葺……ナリシカ、今ハ二階造瓦葺」となった(岡山県赤磐郡西高月村 一九〇五年)、「住宅及納屋は従来多く藁葺なりしが現今は瓦葺となすもの多く、納屋の如きも近来新築するものは大抵となす」(島根県八束郡大庭村(一九一九年)などと、¹⁰⁾ 瓦葺家が藁葺から瓦葺に変わったなどと記すものが少なくない。それらは直ちには景観の大きな変化をもたらすわけではないが、景観は変化しつつある。

農村景観変化をもたらす農村内部での要因は小さく、変化は外部からもたらされる。近代化・都市の影響である。

例えば徳富蘆花の『みゝすのたはこと』(一九一三年)は、明治四〇年代(一九〇七)の東京から約三里の地、北多摩郡粕谷村辺での一見変らないような村民の生活に生活難が押し寄せてみなが稼ぎ様が猛烈になった、東京への出稼が多くなり、奉公人不足となったというような生活面での変化を記すとともに、東京市中で筍がよい値で売れるので畑地が孟宗藪となり、市内でガスが普及して薪の需要が減じたので雑木林が畑となる、養蚕が盛んとなって桑畑が増加する、などという土地利用の変化を記している。それによる耕地景観の変化が読みとれる。このような変化はあるが、全体としては農地、農家・集落の状況に大きな変化はなく、村の景観は大きくはかわらない。

しかし、景観の変化を促す状況は進みつつある。工場敷地としての土地買があらわれたり、電鉄会社はそれは不首尾ではあったが、墓地造成のための土地買収工作が行なわれたりしたことなど、である。⁽¹¹⁾

このように変化はあったが、しかし、それはその後の大きな変化の序章にすぎなかった。大きな変化は戦後である。

五、現代の景観の変化

(一) 都市景観

東京の明治三〇年代(一八九七)に時期的にはずれつつも近代都市としての様相をみせた各都市は、その後、あるいは震災や戦災などの被害と再建などで変化するが、多くの場合、大きく変化するのは、第二次世界大戦後の復興期を経た後の、高度経済成長期である。日本列島をつなぐ新幹線、高速道路網、各地の工業開発、都市化の拡大という産業社会の全面的展開によって、都市が農村が大きく変化する。

東京についてみると、⁽¹²⁾林立する高層ビル、うねる高速道路網、拡がる埋立地と化学コンビナート、消滅する河川などの、

コンクリートリッジングとみまがう都市景観はこの高度経済成長期に顕われた。路面電車から見える光景が変化する頃、路面電車自体が地下鉄にとって代られ、街のたたずまい、人々の暮らしを車窓から垣間見ることができなくなった。都心部はやがて人口が減少し、学校が閉校し、町工場も移転・廃業となっていった。田山花袋は、明治の東京の移り行きの描写で、電車が出来て東京は変わったといったが、それになぞらえていえば、路面電車が消えた東京は大きく変わった東京であり、その景観もまた大きく変化したのである。

とはいえ、東京の都市景観はジャングルのみではない。本郷、佃島の一部などに明治の東京の家並があり、郊外に生活圏が拡大している。東京は人々の生活の場であり続けているのであり、この人々の生活の場としての都市景観は、生き続けている。地方都市は、地方中核都市は東京のミニ版で後追いするように変化し、景観も変化した。他方、取残された地方都市もある。

(二) 農村景観

戦後日本の大きな改革である農地改革によって日本の農業・農村は大きく変わった。それは自作農中心の農業であり、自作農家からなる農村となった。都市工業・軍事工業の壊滅によって工業は後退し、農業のウェイトは大きくなった。農村は人々であふれ、活気があった。農業そのものは、なお、人力主体のものであり、農村は農地を取得した多数の農家が家族労働で農業を行なう場所であった。

やがて農業機械が普及するにつれて、農業従事期間は短縮し、また、農業機械購入費の調達などのために農業外就業が広汎となった。高度成長期になると、農村民は労働力として都市に引き出され、農地は工場用地・道路用地・住宅用地などに転用されていった。

こころみに農地面積をみると、明治以降、この間に第二次大戦の戦中・戦後期の減少期を含みながら拡大し、一九六二年

に最大となり、以後減少に転じた。農家戸数も増加を続け、一九五〇年を最大として、以後減少に転じた。はじめは専業農家が減少したが、やがて第一種兼業農家、そして第二種兼業農家も減少に転じた。

この農地と農家の減少が高度経済成長期に進展したのである。耕地と農家を大きな構成要素とする農村景観の変化がこれから想定できるであろう。

農業集落は、一農業集落当り戸数は、一九五五年は五二戸、うち農家が七五%であったが、一九八〇年は一四一・七戸、うち農家は二三・三%である。農業集落は非農家の居住場所となった。⁽¹³⁾

農地の減少は、農地の潰廃による。それは農地外への転用である。農地からの転用のあった集落は、一九六〇〜七〇年間に三七・九%、一九七〇〜八〇年間に六七・〇%である。道路敷地、住宅用地、工場敷地であるが、七〇〜八〇年間には山林（植林）が二〇・四%と大きい。山林化は耕作撤退という消極的な植林であろう。

耕地面積の減少、耕作放棄地は、都市的集落と山村集落に大きい。しかし平地村集落でも小さくない。

土地基盤整備を行なった集落は、一九七〇年までに四四・六%、一九七〇〜一九八〇年に三三・一%である。二度は行なわないとすれば、七七・七%が行なったということである。⁽¹⁴⁾ 農業機械化にともないこのような圃場整備が行なわれ、水田耕地景観は変貌した。また、施設園芸のハウス施設などによって畑地景観も変った。これらによって新しい耕地景観が形成されている。

徳富蘆花が『みづのたはこと』で戸数二六戸と記した粕谷は、その後、一九四二年一〇〇戸、五〇年二五〇戸、六〇年九〇〇戸、そして六六年一四六六戸となった。この間、小麦・甘藷を中心とした作物から養蚕をへて、昭和初年には蔬菜となり、また筍の産地となった。戦中・戦後の食糧危機の頃は竹林は伐採され、大麦が増加して穀物生産となったが、一九五〇年頃から再び野菜中心となった。それを担ったのは蘆花時代から続く地元の農家であった。当時すでに農家は不動産経営を行っていたが、まだ、勤勉な農家であった。そのようななかで、六〇年に水田共同耕作組合が結成された。粕谷以外を

含む一七戸で、水田提供面積は二町六反九畝二五歩であった。これはマスコミに「世田谷コルホーズ」として報じられ、注目を浴びた。当時すでに水田用水路に近くの工場や団地からの排水・汚水が流れこむなど生産条件が悪化し、農家は農地を持って余しぎみであった。水田一帯が都の公園指定地にされていたので、転用できないという状況のもとで省力化による有効利用を図るというものであった。しかし、都市化の影響は著しく、用水の汚染や病害虫の増大で成績もそれほど上らず、蘆花公園の拡張によって経営水田の大部分が買収となって六二年度をもって解散した。⁽¹⁵⁾

郊外へ放射状にのびる電鉄路線と電鉄路線の間は、駅周辺に商店街があり、住宅もあるが、やがてその中間は畑地が拡がっていたこの辺りも、竹林や畑が宅地に変り、水田が集合住宅や学校用地となっていく時期である。共同耕作組合の結成は都市化のもとでの農業対応であり、その解散はその終焉を示すものといえる。そして、それは粕谷の農村景観が大きく変化したことでもある。

近郊農村と対照的である中山間地域の農村をみよう。ここも農家戸数が減少し、耕地面積が減少し、耕作放棄地が多い。この中山間地域は、田畑、農業用水路、溜池とその周りの雑木林が一体となった里山とよばれる第二次的自然の典型地であるが、雑木・柴草の使用が減退し、耕地利用が減少し、用水路・溜池も利用減少している。農業集落が変化し、その機能を弱め、それによる農業が後退し、里山が荒廃しつつある⁽¹⁶⁾ということである。そして、長い期間かけて形成された農村景観が大きく変化しつつあるのである。

平場の平地農村においては、都市近郊・中山間地域ほどの変化の指数は大きくない。しかし、ここは基幹的農業地である。そこにおいても同様の現象が大きいことに、日本農村全体の大きな転換が示されているといえよう。それは農村景観全体の変化に連なるのである。

五、おわりに

以上、江戸時代を歴史的前提として、近代における景観形成、その変化を概観した。近代成立期が新しい景観形成の画期であり、新たな都市景観、農村景観が形成される。明治期には新しい都市景観の形成されたが、農村景観は相対的に連続的であることをみた。この点については、欧米諸国との比較において、その特質が明らかとなる。

イギリスの近代工業は農村工業の展開を起動力として成立し、近代工業都市が生まれたが、この産業革命に前後して、農業革命が進行し、農村は大きく変った。イギリスの今日の農村の景観はこの時に形成されたものである。その時期の都市の変化も大きいことはいうまでもないが、農村の変化もまた大きかったのである。これに対して日本の場合は、明治の近代化の時期に、農業・農村にはこのような大きな変化はなく、これが大きな変化に直面したのは、第二次大戦後の高度経済成長期である。もっとも、それは農業それ自体の発展的契機によるものではない受身的であるので、積極的な農村改造、それともなう農村景観の形成ということではない。他方、東京に見るように、明治期の変化は大きく、その後さらに変化し、そして高度経済成長期に著しく変貌した。

都市といわず、農村といわず、高度成長期以来の変化は大きく、景観も大きくが変化しつつある。人間の営みはたえまなく変化・発展する、したがって、景観のいかなる変化も止むを得ない、ということではありえない。資本の論理にもとづく経済効率優先の営み自体が問われるべきことからであり、経済効率優先がもたらす景観変貌は見過してよいというものではない。この景観を守ることは、経済効率優先の在り方を問い直すことになる。それなりに調和があり、見た目にもきれいで、バランスが取れている景観を維持することは、地域のあり方や、環境保全とも結びつく重要なことからである。景観そのものを対象とする景観学は現在に立ち向う学問であろうが、歴史の方法としての「景観史学」もまた、現在に立ち向う歴史学であるといえよう。

- (註)
- (1) 歴史学における景観研究の意義や方法については、木村礎「景観研究の意義と方法」(木村礎・林英夫編『地方史研究の新方法』八木書店 二〇〇〇年一月)が簡潔に示している。
 - (2) 日本村落史講座編集委員会編『日本村落史講座3 景観Ⅱ 近世・近現代』雄山閣 一九九一年 いくつかの近現代の村落景観に関するものがある。
 - (3) 木村礎氏は、前掲「景観研究の意義と方法」において景観を自然景観と人為景観に分かっているが、私の「人間の営みがつくり出した眺め」はこの人為景観にあたる。
 - (4) 木村礎『日本村落史』弘文堂 一九八七年。日本村落史講座編集委員会編『日本村落史講座3 景観Ⅱ 近世・近現代』雄山閣 一九九一年。
 - (5) 小木新造他編『明治大正図誌』第一(東京1)巻 筑摩書房 一九七八〜七九年。
 - (6) 「東京の三十年」『田山花袋全集 第十五巻』文和泉堂書店 一九七四年 四四五、四四九ページ。
 - (7) 「東京の三十年」『田山花袋全集 第十五巻』 六六一ページ。
 - (8) 岡山市役所編『岡山市史 第六』一九三八年、岡山市史編纂委員会編『岡山市史 産業経済編』一九六六年を参照。
 - (9) 木村礎「国生村―長塚節『土』の世界―」(木村礎編『村落生活の史的研究』八木書店 一九九三年)、後、『木村礎著作集 第八巻 村の世界・村の生活』名著出版 一九九七年に収録。
 - (10) 神立春樹『明治期の庶民生活の諸相』御茶の水書房 一九九九年 一七八、二〇五ページ。
 - (11) 「み、すのたはごと」『明治文学全集 四二 徳富蘆花集』筑摩書房 一九六六年。
 - (12) 小木新造他編『明治大正図誌』第三(東京3)巻 筑摩書房 一九七九年。
 - (13) 農業集落研究会『日本の農業集落』農林統計協会 一九七七年 三三ページ。
 - (14) 神立春樹『戦後村落景観の変貌』御茶の水書房 一九九一年 第一章戦後農業集落の変貌。
 - (15) 江波戸昭『東京の地域研究』大明堂 一九八七年 一五二〜一五六ページ。
 - (16) 神立春樹「中山間地域の農村景観」(『地方史事典』弘文堂 一九九七年)。なお中山間問題を扱った小田切徳美『日本農業の中山間地帯問題』農林統計協会 一九九四年 を参照。

参考文献1 近代における景観変化

- 徳富蘆花『み、すのたはごと』服部書店・新橋堂 一九一三年
- 田山花袋『東京の三十年』博文館 一九一七年
- 古島敏雄『土地に刻まれた歴史』岩波書店 一九六七年
- 小木新造他編『明治大正図誌』第一(東京1)〜第三(東京3)巻 筑摩書房 一九七八〜七九年
- 日本村落史講座編集委員会編『日本村落史講座3 景観Ⅱ 近世・近現代』雄山閣 一九九一年
- 高島緑雄編『木村礎著作集 第七巻 村の世界 村の景観』雄山閣 一九九六年
- 藤森照信『明治の東京計画』岩波書店 一九九〇年
- 杉浦芳夫『文学のなかの都市空間―東京とその近傍―』古今書院 一九九二年
- 神立春樹『明治文学における明治の時代性』御茶の水書房 一九九九年
- 参考文献2 現代における景観変化
- 農業集落研究会『日本の農業集落』農林統計協会 一九七七年

- 勝原文夫『農の美学』論創社 一九七九年
勝原文夫『村の美学』論創社 一九八六年
江波戸昭『東京の地域研究』大明堂 一九八七年
日本村落史講座編集委員会編『日本村落史講座3 景観Ⅱ 近世・近現代』雄山閣 一九九一年
神立春樹『戦後村落景観の変貌』御茶の水書房 一九九一年
小田切徳美『日本農業の中山間地帯問題』農林統計協会 一九九四年

小論は、山形大学における教養教育課外講座講義「明治・大正・昭和における日本の景観の変貌」(二〇〇〇年一月二〇日)を文章化したものである。この課外講座の担当の葛西大和教授に提出された履修学生のレポートに本講義についての感想文があるが、その中から例示的にあげる。

まず、この授業内容については、「景観の形成と変化」ということから歴史にアプローチしていく方法を、初めて学んだ」(110086)、「景観というものに目を向けるということは、我々が歴史を研究していく上での一つの手段であり、過去についての一切の文献が無い状況におかれた場合、当時の景観の形成や、その変化を知ることにより、その時代を生きた人々の行動、人々の行動の動機づけとなる社会的背景を知ることができる、といったようなことを理解、とまではいかないとしても、知るきっかけとなりました」(110200)、「歴史を年や農村の景観からアプローチしていく研究することは、いままで聞いたことがないことであり、……」(110308)、「今回の課外講義を聴く前には、景観の変化で経済社会の歴史的發展を検討するとは思いませんでした。……少しおもしろかった」(310075)、「今回のこの講座では経済社会の歴史的發展を、景観の形成と変化ということから検討する、といった私には斬新的にも思えるような内容であった」(310081)、「まず、『景観』というものを歴史を考察する為の道具とすることに驚いた」(411026)、「明治・昭和の歴史的發展を、今までは違った観点『景観』から検討しようという着想には少々驚いた」(610002)、「日本の景観変貌などという事は今まで気づきもしない事柄であり、ましてやそれを史的考察の視点から見るという発想には少々驚いた」(610002)、「明治・大正・昭和の日本における景観の変貌」という題、誰もが明治・大正・昭和の風景が写っている写真や絵を並べて、教授が景色の変化を説明する講義を想像するだろう。しかし実際この授業は違っていた。景観とは『人間の営みがつくり出した眺め』の意味であり、つまりそのことは、政治、経済、産業、技術などのすべてのことが人間に影響している。そして景色やそこに住む人々の精神的な部分にまで影響を与える幅広い学問であることが第一印象であった。(色々な面から学問を掘り下げていることがわかった) (610070)、「景観」という視点で歴史を探るといのは、考えてみたことも、思いつきもしなかったもので、おもしろいことを考えました」(610112)がある。

それに先立つ用語そのものについては、「はじめに関心をもったのは、先生の『景観』の用法についてであった。『景観とは人間の営みがつくり出した眺め』という意味内容」とのことであったが、その後『人間の営みと景観の形成』として詳しく説明されているが、私はとても共感を覚えた」(210328)、「特に注目したいには言葉の定義付けでした」(310171)、「今日の講演で景観という言葉の意味を理解できた。景観とは人間の営みがつくり出した眺めである」(610087)があった。

さらに、歴史の授業の在り方に関わり、「今までの歴史を学ぶときは年代と出来事、そしておおまかな様子の暗記でしたが、今回の講義で別の学習の仕方を知ることができました」(610058)、「講義内容は、自分としては、あまり考えたことのないことでしたが、先生が楽しそうに、うまく講義をしていたので、たいへん集中して聞いてしまいました。……景観を見ることでその土地の歴史を読み取れることを知ってよかったです」(310111)、「神立先生がおっしゃられた『学問は決して抽象的であればいいというものではない。自分の知りたいと思うことから始まる』という言葉を目に、まだまだ分からないことばかりであるが、これから少しでもすすんでいければと思っています。大変楽しい御講義でした」(310168)、「この講義の最初に『歴史学の景観的なアプローチ』ということを書いていたが、そのような見方も十分にできるということを新たに知った。最も身近といってもいいほど近く存在から歴史を考えると、身近な環境の變化などを知る手がかりにもなり得るのではないかと思った」(610147)がよせられた。

そして、関心のあること、研究してみたいこととして、中山間地域(110086)、地元山形・作谷沢(110160)、実家宮城(110296)、出身地の景観(3100

35)、祖父の家(310057)、わが兼業農家(310043)、山形(310102)、東京都港区近辺・鶴岡(310171)、家の町の図書館(310...FK)、わが家の農業(512060)、わが家の農業(513125)、山形県(610070)、宇都宮(610074)、山形市・栃木の実家辺(610112)、山形市(610141)、「尾曳の城の跡しめ」(610147)、をあげている。

これらの感想文をふまえて次のメッセージを履修生に提示した。
学生諸君へ

十月二〇日の教養教育課外講座「明治・大正・昭和の日本における景観の変化」についてのみなさんの感想文を読ませていただきました。

人間の営為が作り出した「景観」を通じて歴史を探るということを提起しましたが、このことについて多くの方々から同意、共感がよせられました。人間の営為が歴史的に変化することにより、景観も歴史的に変貌すること、そして、人間社会の歴史的展開は地域・国により差異があるので、景観の形成・変貌についても相違のあること、時代的には産業革命期Ⅱ近代成立期が新しい景観形成の画期であり、新たな都市景観、農村景観が形成されるけれど、日本は欧米諸国と異なること、これらについても筋道としては理解していただけたと思います。

イギリスの近代工業は農村工業の展開を起動力として成立し、近代工業都市が生まれますが、この産業革命に前後して、農業革命が進行し、農村は大きく変わります。イギリスの今日の農村の景観はこの時に形成されたものです。都市の変化も大きいことはいまでもありませんが、農村の変化こそわが国と比較した場合、その特質ということをいいました。相対的に連続的ということになる都市の連続性については、それが石造りであるということにもありますが、都市としての機能、当日、岩田先生が言われた公共性をそなえていたからということによるといえます。

これに対して日本の場合、明治の近代化の時期に、農業・農村にはこのような大きな変化はなく、これが大きな変化に直面したのは、第二次大戦後の高度経済成長期です。尤も、それは農業それ自体の発展的契機によるものではない受身的なものであるので、積極的な農村改造、それにもなう農村景観の形成ということではありません。他方、東京に見るように、明治期の変化は大きく、さらに変化し、そして高度経済成長期に大きく変貌しました。

都市といわず、農村といわず、高度成長期以来の変化は大きく、景観も大きく変化しつつあります。多くの感想文が、自分の住んでいるところ、郷里などにふれつつ景観の変化について記していました。「最も身近といってもいいほど近く」の存在から歴史を考えると、身近な環境の変化などを知る手がかりにもなり得るのではないかと思った。「神立先生がおっしゃられた『学問は決して抽象的であればいいというものではない。自分の知りたいと思うことから始まる』という言葉」があった、という記述がありました。身近な、具体的ものを事例としながら考えていくことは大切なことです。

人間の営みはたえまなく変化・発展する、したがって、景観のいかなる変化は止むを得ない、ということではありません。資本の論理にもとづく経済効率優先の営み自体が問われるべきことがらであり、経済効率優先がもたらす景観変貌は見過してよいものではありません。この景観を守ることは、経済効率優先の在り方を問い直すこととなります。それなりに調和があり、見た目にもきれいで、バランスが取れている景観を維持することは、地域のあり方や、環境保全とも結びつく重要なことからです。歴史の方法としての「景観史学」は、現在に立ち向う歴史学であります。

なお、景観には主観的要素、美的感覚という側面が重要であることもいうまでもないことです。このような美的要素をも含む景観そのものを扱うのは景観学です。私は歴史研究者としての立場からの景観とのかかわりですが、景観そのものを対象とする景観学が発展することを期待しています。講義を聴いてくださりありがとうございました。皆さんお会いできましたことをうれしく思います。どうぞ勉学に励んでください。

(本学国際経済学部教授)